

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 65 No. 2 2013

主幹 新里 眞男

巻頭言

“Thinking for speaking” 外国語学習のもう一つの意義

兵庫教育大学教授 ● 山岡 俊比古

外国語を学ぶことは、学習者がすでに持っている意味世界を単に新しいことばで言い表し、伝達できるようになることではない。外国語学習の本質は、母語の学習と使用を通して培った世界の見方とは異なった、まったく新しい世界の見方を身につけることにある。

個別の言語は、物事や出来事の特徴をとらえて言語化するために、それぞれユニークな仕組みを持っており、人はその表現にあたって、自分が使用する言語の仕組みに合うように考える。このことをアメリカの心理学者・言語学者であるD. Slobinは“Thinking for speaking”と呼んでいる。

これによると、日本人英語学習者は、英語の“Thinking for speaking”を新たに経験し、英語による新しい世界の見方を身につけることになる。例えば、“I have a dog.”と“I like dogs.”を学ぶとき、日本人は、語順の違いもさることながら、不定冠詞付きのdogとその複数形を識別するという日本語では経験したことのない処理を迫られる。また、“My brother loves football.”においては、主語が「兄」「弟」でないこと、主語の三人称単数の認知的取り立て、footballがアメリカではAmerican footballであるという新しい世界の見方を学ぶ。

このような外国語による新しい世界の見方の学習は、外国語について知るのではなく、その使用を実体験することによって初めてなされることに注意が必要である。この意味において、第一義的に外国語学習とは、母語とは違う新しい世界の見方に直結する言語処理を伴う新しい言語体験をすることである。ゲーテの「外国語を知らない者は自分の母語を知らない」ということばは、このことを突いていると思われる。

「英語は使ってなんぼのもの」という表現に託される外国語学習の価値だけでなく、“Thinking for speaking”で示される外国語学習のまさに教育的な意義にも目を向ける必要がある。

小学校を意識した入門期の指導

北海道壮瞥町立壮瞥中学校教諭 大塚 謙二



1. 最近の小学校外国語活動の状況

平成23年度、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第5、第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化された。その趣旨は、「音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うために様々な活動を行う」である。

北海道の現状については、すでに児童や教師にとって小学校外国語活動が特別なことではなくなっている。導入前の不安も概ね解消されたため、小学校外国語活動の研修会への参加者が完全実施の前の年をピークに減少したとも言われている。実際、私が依頼されて小学校で出前授業を行う回数も完全実施前のほうが多く、小学校英語教育の研究会の代表者の方のコメントも同様だった。

また、多くの小学校では市町村のALTとのTeam Teachingをしており、授業のアイデアを出し合い、*Hi, Friends!*も活用して授業を組み立て、児童たちは生の英語にも触れながら活動している。彼らは中学生よりも元気よく英語を発音していることも多く、生き生きと活動に取り組んでいる。小学校では「コミュニケーション」「聞いたり、話したり」の活動をメインとし、発音の矯正もされないことになっているが、ALTが容認できない発音は随時くり返し練習させているようだ。

また、いくつかの授業を参観していて、気になったのは文字の使用だ。ピクチャーカードの下に文字が出ているケースは案外多いが、読ませることはしていない。しかし、なかには少し長めの対話をさせるために、ヒントとして文を英語で黒板に書いてしまっているケースが少数あった。

この点については、小学校外国語活動のあり方を再確認し、理解を深める必要がある。無理なく活動し、英語に慣れ親しむことが重要なので、中学入学以前に英語嫌いをつくってしまったのは本末転倒になってしまう。

2. 小学校外国語活動を経験してきた生徒の反応

外国語活動を体験してきた新1年生は、基本的に従来1学期の4月に行ってきたことのほとんどをクリアしているので、メリットは大きい。

◎メリット

- ・あいさつの表現を理解しており、発話できる。
- ・数字、曜日、天気、月を言える。(以前と比較して知っている語彙の量が多い)
- ・簡単な会話を知っているため、最初からQ&A活動をすることができる。
- ・ALTが指導していた小学校の場合は発音をネイティブらしく発音させても抵抗なく発音する。
- ・英語を使用する活動に意欲的に参加できる。
- ・英語の指示を理解できることが多い。(特にALTがいた小学校)
- ・小学校でALTと接してきた生徒たちは、ALTとの接し方に慣れている。
- ・外国語活動を経験してきたので、中学校の英語授業に抵抗感が少ない。

◎デメリット

- ・英語の授業に対する新鮮味、期待感が少ない。
- ・中学校で授業を始める前から英語嫌いがいる。
- ・ゲームなど楽しい活動をしてきたので、勉強としての授業には抵抗がある。
- ・小学校時代に間違えて覚えてきたことが、なかなか直らないことがある。

私の担当している生徒たちは、全員が初日から簡単な自己紹介ができたり、Do you like ~? - Yes, I do. / No, I don't.のやりとりも可能だった。しかし、気をつけなければならないのは、複数の小学校から生徒が入学する中学校だ。体験してきている*Hi, Friends!*の内容はほぼ同様だが、日本人教師やALTが独自に行っている指導内容については違いがあるので、ある知識をもっていたり、そうでなかったりする。それらを知らない生徒た

ちが悲しい思いをしないように中学校で対応する配慮が必要だ。

3. 入門期：中学校英語にソフトランディング

小学校では主に1人称のことを表現したり、2人称とのQ&Aがメインだった。基本的に3人称についての表現するのは中学校の役割となる。

このような情報も中学校教師には有益だ。だからまず、中学校教師がしなければならないことは、小学校外国語活動の内容について知ることだ。文科省のHPにも『*Hi, Friends!* 関連資料』があるので、簡単に情報を確認できる。また、*Hi, Friends!* や『英語ノート』の「教師用指導書」も目を通すと参考になることが多い。そこには、小学生が目にする内容と中学校でも効果的な活動、Classroom Englishなど、多くの資料がある。それらは、小学校で使用されてきた可能性が高いので、中学校でも継続することが小・中の連携につながる。

次に慎重に進めていかなければならないのは文字の導入時期と方法である。小学校と中学校で扱う英語の大きな違いは、「文字指導」で、音とつづりと意味をつなげてあげることだ。単に文字の指導と言っても気をつけなければならないことは次のように多数ある。

(1) 文字指導：アルファベットの大文字、小文字

- ①文字を見て発音できる
- ②文字を見て書き写す
- ③発音を聞いて文字を書く
- ④アルファベットの名前と音(基礎的なフォニックス)

(2) 単語指導：英単語をいつどのように読ませるのか、書かせるのか、テストするのか

(3) 文章指導：英文をいつどのように読ませるのか、書かせるのか、テストするのか

1年生の場合、「どのような順序で」、「いつ(時期)どのように(方法)」を間違えてしまうと理解が深まらないばかりか、混乱させたり、英語嫌いを増やしたりすることになってしまう。したがって、中学校の英語は、小学校とは違い、単なるゲーム中心であるという考え方から、覚える作業を伴う学習だという心構えをさせていく必要がある。

そこで、ソフトランディングのための柱として、

入学直後から少なくとも1学期の間はフォニックスの基礎的なことだけでもよいので取り組ませたい。ALTの多くも小学校低学年でフォニックスを学び、Wednesdayのつづりを覚えるときに「ウエドゥ・ネズ・デイ」というようにフォニックスを使用して文字とつなげているということだった。このような単語を覚える方法を教えることも生徒たちを中学校英語にソフトランディングさせることにつながる。

4. 新しいSunshineの活かし方

今回の改訂版では、そのつなぎの部分をしていねいに扱うように工夫した。最初のLet's Start 1「あいさつ」、Let's Start 3「自分のことを言ってみよう」では、意図的に場面に対する生徒の表現を空欄にして、小学校で活動したことを自由に言わせるようにしてある。もしかすると、小学校の学校、学級による違いもあり、新たな発見につながる。Let's Start 4では、小学校では発音の矯正はしなかったが、英語らしい発音の単語を取り上げて、聞いて日本語の発音との違いを感じとり、そして、英語らしく発音する活動を通して発音を大切にすることを意識させたい。ここで開始される「発音チャレンジ」「アクションタイム」は発音の改善、音と意味をジェスチャーで定着させるものだが、生徒たちに好評なのでぜひ取り組んでいただきたい。

そして、音から入って文字につなげるために、新たに文字の学習をProgram 1として扱うようにし、効果的な指導を展開できるようにした。

5. おわりに

中学1年生は、脳を使ってルールや理屈で学ぶ(意味学習)よりも身体で発音や意味をくり返し学ぶ(反復学習)ほうが得意だ。効果的な学習方法を学び、小学校でinputされたことを文字につなげてソフトランディングさせたいものである。

参考文献

大塚謙二・胡子美由紀(2012)『成功する小中連携！ 生徒を英語好きにする入門期の活動55』明治図書

未来を生きる
英語教育

小・中連携を意識したICTの活用

埼玉県所沢市立狭山ヶ丘中学校教諭 高橋 伸行



1. はじめに

平成24年度から中学校においても新学習指導要領に基づいた授業が実施されている。小学校では平成23年度から外国語活動が必修化されており、「コミュニケーションへの素地」を身につけて中学校に入学してきた生徒に対して、外国語活動との円滑な接続を図りながら授業を行うことが重要な課題の1つであると考えている。現実的に小学校外国語活動指導者との連携を密にすることが、時間的な制約もあり困難な状況にある中で、どのようにすれば「中一ギャップ」を生むことなく中学校の授業に慣らしていくことができるのか。また、外国語学習においてすでに、英語に対する苦手意識をもってしまった生徒にどのようなアプローチをしていけば苦手意識が改善されるのか。本稿では、ICTを活用した授業とデジタルコンテンツの開発を通じた小・中連携を紹介したい。

2. なぜICTを活用するのか

外国語活動においては、動画やスキット実写版などのデジタル教材を通して英語を学習してきた生徒が多いことはさまざまな調査や検証結果からわかっている。このような情報発信型の授業に慣れた生徒に対し、中学校入学と同時に授業形態が一変してしまえば、学習環境の変化により、英語に対する苦手意識をもつ生徒が増える可能性がある。また、すでに苦手意識をもっている生徒は学習意欲の低下が進み、その結果、「英語嫌い」になってしまう危険性も高まってしまう。この現状に鑑みると、中学校においても入門期の生徒に外国語活動で慣れ親しんだICT機器を活用した授業を効果的に行い、英語に苦手意識をもっている生徒も興味・関心を示し、意欲的に英語学習に取り組むことができるデジタルコンテンツの活用が課題解決の糸口になると考える。

3. 外国語活動を生かすデジタルコンテンツ

所沢市では外国語活動の充実を図る市独自教材

『英語学びノートDVD』が作成されている。このDVDには市内のALTが出演し、児童がネイティブの発音に慣れ親しみ、視覚的・体験的に英語に触れ、コミュニケーションの素地を養いながら理解を深めるとの目的で制作され、市内の外国語活動で活用されている。本校の学区の2つの小学校でも本校に勤務するALTが自作のデジタルコンテンツと併用しながら、指導している。この恵まれた環境もあり、小・中共通のデジタルコンテンツを作成することとした。外国語活動で慣れ親しんだキャラクターや授業で活用したデジタルコンテンツを継続的に取り入れた授業実践を行うことで、英語学習に対する苦手意識の改革や不安の解消を図る一助となっている。ここでは実際に外国語活動で活用しているデジタルコンテンツを2つ紹介したい。どちらもスピーキングやQ&Aなどで活用でき、授業が盛り上がる小道具的なデジタルコンテンツだが、非常に好評であり、生徒は意欲的に学習に取り組んでいる。

(1) ルーレット

パワーポイントで作成。グループワークなどのポイント決定に活用している。生徒がスタートとストップを決定し、止まったところのポイントを得る。



ルーレット

(2) パネルクイズ

パワーポイントで作成。数の指導やQ&Aなどのグループワークなどに活用している。生徒がQ&Aに正解できれば、シートの下に隠れたポイントを得ることができる。

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	32	33	34	35
36	37	38	39	40	41	42
43	44	45	46	47	48	49
50	51	52	53	54	55	56
57	58	59	60	61	62	63
64	65	66	67	68	69	70

パネルクイズ

紹介した2つのデジタルコンテンツは作成に1時間ほどかかるが、インターネット上で簡単に制作方法を検索することができ、図解入りで解説してあるので、それほどストレスを感じることなくデジタルコンテンツを制作することができる。

4. 苦手意識を変えるデジタルコンテンツ

一見、デジタルコンテンツの作成には膨大な時間を費やすように感じられ、懸念されがちだが、新出文法事項の導入ならば30分程度でデジタルコンテンツを作成することが可能である。また、一度作成しておくことで、アレンジや他教員との共有が可能になること、板書の時間が大幅に短縮され、個に応じた指導が可能になることなどのメリットが生まれる。デジタルコンテンツは「苦手意識をもった生徒もわかる」ことを念頭に、アニメーション効果を活用しながら、情報を小出しにし、新出文法事項を導入するよう心がけて作成している。入門期の生徒や苦手意識をもった生徒は「クイズ番組」のような視覚に刺激的な情報が入ってきたときに、意欲的になることが多く、静止画像やアニメーション画像は最新のものが望ましい。現在は備品のイラスト集(CD)とインターネット上に無料公開されているイラスト素材サイトにメールで趣旨を説明し許可を得て、最新のイラストや静止画などを活用している。

(1) 新出文法項目の導入

パワーポイントのシート上に静止画像を掲示し、既習の文法事項を復習しながら新出文法事項を導入していく。ICTを活用することにより、既習の文法事項を短時間で、しかも効果的に復習することができ、生徒がスパイラルに英語学習を進めることができる。

〈新出文法項目導入時のスライドの見せ方〉

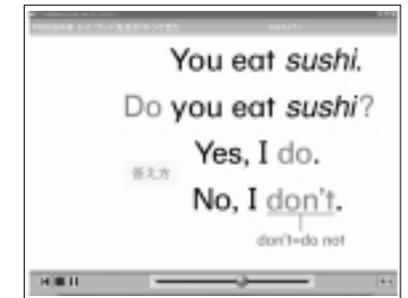


- ① Is this a basketball?
(ボールだけ掲示)
- ② What is this?
- ③ Is she a teacher?
(生徒だけ掲示) など

(2) パワーポイントでの制作方法

- ① 新しいシートにイラストを貼る
- ② 図形から吹き出しを選び、シートに貼る
- ③ ワードアートで文字を入力
- ④ 見せていく画像順にアニメーションを設定
- ⑤ プレビューでシートを確認する

制作に時間がかかると思われていたデジタルコンテンツも、複雑なコンピュータ操作をせずに手軽に作成することができる。また、自作のデジタルコンテンツで新出文法事項を導入したあとで、デジタル教科書の新出文法項目の説明を活用している。デジタル教科書の文法項目の説明は生徒の視覚に訴え、思わず見入ってしまうように作成されており、自作デジタルコンテンツと併用することで基礎・基本の定着を図ることができる。



『サンシャインデジタル教科書』文法アニメ

5. おわりに

年末に行ったアンケートでは約8割の生徒が「楽しく勉強できた」「最初は難しいと思ったけど絵を使って教えてくれたのでよかった」など、好意的な感想も多く、授業実践の効果を実感することができた。その一方で「授業のときはわかるけど…」という反応をする生徒も見られ、今後、学習指導要領との絡みの中で4領域のバランスを考えてデジタルコンテンツを活用していくことが必要不可欠であり、デジタルコンテンツを活用することで生まれた授業時間をどのように効果的に活用していくのが課題である。

意欲と自信をもたせる入門期の指導

高知県土佐町立土佐町中学校主幹教諭 山中 由香



1. はじめに

小学校で英語の指導が始まったのは約20年前のこと。高知県でもいくつかの小学校で試験的な授業が行われていた。「外国語活動」として正式に小学校に導入される前から、英語を学習して中学校へ入学してくる新入生の指導をどうすればよいのか、いろいろと論議はされてきたが、実際のところ中学校の英語教員が小学校での授業を見る機会も少なく、以前と変わらない授業をしている教員が大半であった。

2. 研究会スタート

2009年秋、中・高の英語教員に呼びかけをして、研究プロジェクト(通称「幹&Apple」)を始めた。中・高・大の教員が月に1度集まって、授業改善について研究している。重要な活動の1つがオンラインブッククラブである。Sunshine English Courseの著者である、北原延見先生の『英語授業の「幹」を作る本』を各自で読み、毎週メールでレポートを出し合っている。また、月1回の例会でも、お互いの実践を報告したり、オンラインブッククラブでの議論をもとに意見交換を重ねたりしてきた。



その中で、メンバーが強く関心をもったのが、同書にある「入門期の8時間」であった。小学校外国語活動が始まったのに、今までどおりの授業でよいのだろうかという問題意識が共有され、教科としての英語をどのように指導していくのか、

根本的な授業改革が必要だと考えた。英語を書くことを経験していなくても、アルファベットの読み方や、たくさんの表現を知っている1年生は、中学校の英語の授業に期待をもっている。それとは逆に、外国語活動が苦手な中学校の英語学習に不安を感じている生徒もいる。英語を教えるプロである英語教員が、不安を解消し、期待に応えられるような授業を仕組んでいかなければいけないのは当然である。

そこで、北原先生の著書をもとに、「入門期の8時間」を、1年生を担当しているメンバー数人が、それぞれ実際に行うことにした。

3. 入門期指導のポイント

(1) 中学校英語とのエンカウンター

あいさつや、クラスルーム・イングリッシュ、クイズなどを通じて小学校で学習した表現などを活用し、学習したことが生かされることを実感させた。またJTEとALTが、一人ひとりの生徒と握手をしながら、簡単な英語の質問に答えさせた。小学校で学習した表現が通じることを実感させることで、中学校での英語学習に自信をもたせるようにした。



(2) 中学校英語へのガイダンス

外国語活動からのスムーズな移行を図るため、英語授業のルールを説明した。ペア活動、提出物の期限を守ることなど、中学生としての意識をもたせるためである。ペア活動は、英語の授業では必須の活動であるので、やり方などをていねいに指導した。

(3) Can-Doリストの実施

外国語活動でどの程度の英語ができると感じて

いるのかを知るために、Can-Doリスト(英検5級程度)に回答させ、現状を把握するようにした。

(4) ていねいな発音指導

中学校の英語教員の重要な役割は発音指導である。生徒は正確な発音を習得することで、その後の英語学習に積極的に取り組める。そこで、アルファベットの名前と音についての指導に時間をかけた。チャンツでアルファベットを覚えさせたり、単語を覚えるときにジェスチャーを多く取り入れたりするなど、小学校の授業の延長のような楽しい雰囲気の中で英語を習得していく工夫もした。同時に、f, v, thの発音の徹底指導を始めた。JTEとALTがチェックをして、全員合格するまで毎時間続け、8時間目には全員が合格できた。

(5) 辞書指導

文字に慣れてきたところで辞書指導を行った。早い段階から辞書で単語の意味を調べられるようにしていった。今では、授業中はもちろん、休み時間などにも楽しそうに辞書を引く姿が見られるようになった。自立した学習者への第一歩である。

入門期の8時間

1時	中学校英語とのエンカウンター Can-Doリストの実施			アルファベットの 名前と音 発音の徹底指導
2時	英語のあいさつ ペア・ワーク	英語の歌	辞書指導	
3時	単語のつづりと 読み方①			
4時	大文字・小文字			
5時	単語のつづりと 読み方②			
6時	動詞をジェス チャーで導入			
7時	ジェスチャー			
8時	教科書 Program 1			

※Sunshine English Course 1のLet's Start~Program 1を、適宜取り入れて指導した。入門期のていねいな指導のためにふさわしい学習内容になっている。

4. 実践の成果

入門期指導の見直しで、効果的だったことを整理しておきたい。

第1に、それぞれの生徒が外国語活動でどの程度

■ 小学校を意識した入門期の指導

の英語を習得してきているかがわかり、その後の指導に見通しがついた。Can-Doリストは、4月、9月、12月、3月と年間4回実施したため、生徒の英語力の伸びを知ることもできた。教師は、生徒が「できない」と思っていることを意識して指導することができるので、実施することをお勧めしたい。

第2に、ていねいな発音指導が生徒の意欲と自信を生んだことである。従来に比べてかなり意識的に指導を行い、その後の授業でも発音を大切にしていた結果、意識して英語らしい発音をする生徒が多くなった。また、アルファベットの「名前読み」と「音読み」を入門期にていねいに指導したことで、その後の授業の中で、つづりを見れば発音が推測できるようになった。特に、小学校のローマ字学習でつまづいていた生徒にとっては、不安を取り除くために時間をかけて指導することが大切である。この授業以降も、フォニックスなどを活用して発音指導を行い、生徒は読むことについての自信をもち、意欲的に音読に取り組んでいる。

第3に、中学校英語への期待をもたせることに成功したことである。英語の歌も入門期から取り入れたが、その時期に学習している内容にふさわしい歌を歌わせることで、より英語学習への意欲がもてるようになる。休み時間に廊下で英語の歌を楽しそうに歌っている姿を見かけると、教師も、次の歌は何にしようかと楽しみになってくる。

5. おわりに

上記のように、入門期に8時間という長い時間をかけ指導してきた成果は表れている。しかし、Can-Doリストの経過を見ていると、英語学習に自信がもてない生徒も出てき始めている。つまり、その後の指導こそが英語嫌いをつくらないために重要である。3年間のゴールを見据え、意図的かつ計画的に日々の授業づくりを進めていくことにより、入門期指導が生きてくると言えるのではないだろうか。

参考文献

北原延見(2010)『英語授業の「幹」を作る本』(上・下巻)ベネッセ



英語教育の新たなステージへ

北海道教育大学札幌校教授 萬谷 隆一



いろいろな地域の小・中連携の取り組みを見ても、新しいタイプの中学校の英語の先生が出てきていることに気づきます。それは、近隣の小学校で外国語活動に取り組む小学校の先生たちと積極的に関わり合おうとする中学校の英語の先生たちです。巡回指導員や連携コーディネーターなど、行政的な役割を帯びて活動するケース、地域の学校同士のつながりから協働するケース、個人として小学校の先生と関わろうとするケースなど、さまざまですが、そうした新しいタイプの中学校の英語の先生に共通したイメージがあるように思われます。まず、上から目線でないこと。つまり小学校の先生たちと、「同僚」としてつきあう先生たちのイメージがあります。英語の専門性を押しつけずに、支援の糧として手をさしのべようとする方々です。次に、小学校の外国語教育や小学校の先生から、中学校にはないよさを感じることが出来る先生というイメージがあります。そうした中学校の先生は、小学校の先生や外国語活動の授業などを見て、中学校の英語授業に足りないところ、逆に中学校英語でこそ教えるべきことを感じとり、柔軟に自らを変えておられる印象があります。

自分の中学校内のことだけでもとても忙しいのに、そうして小学校の先生たちとつながろうと努力される先生方の姿には、これからの英語教育に新しい風を吹き込む、新たな中学校の英語教師像を感じます。

さて、小学校での外国語活動が広がってゆくにつれ、これからの重要課題となる小・中連携に取り組むにあたって、いくつかのポイントを示したいと思います。

●橋渡し指導を工夫する

中学校英語は、小学校外国語活動から劇的な変化となってしまわないように、中1の1学期が「接続期」であるという意識をもって指導したいものです。そこで決定的に必要なのは、中学校英語教師が小学校外国語活動で生徒たちが何を学んできたかを知ることです。まだ一度も、教材(*Hi, friends!*のテキストとデジタル版)や授業を見たこ

とがない方は、ぜひともご覧ください。できましたら、竹内(萬谷ほか2011:82)のように、外国語活動で使っている言語材料・指導方法を中学校入門期で、少しバージョンアップして使うのも有効な手段です。もう一つ、入学してきた生徒たちに何が出来るのかを確認することも、これからの中学校英語では、重要な点です。これは、小学校外国語活動ですでに身につけてきたことを中学校でくり返してしまったり、あるいは過度な要求をしたりしないように、1年生新学期において、ぜひ必要なことです。

●インプットの質と量を増やす

小学校の先生たちは外国語活動において、英語を果敢に使用しようとする「コミュニケーションのモデル」としての役割が期待されています。一方、中学校の先生たちは、もちろんコミュニケーションのモデルは当然のこととして、やはり「英語のモデル」としての役割を果たすべきです。授業で積極的に英語を使い、学習の糧となるインプットをたくさん聞かされるよう、高い英語運用力が求められます。それに加えて、ターゲットとなる文型や既習の英語をさりげなく織り込みながらインプットの「質」を調整する力も必要です。

●アウトプットの質を高める

中学校では従来以上に、アウトプットの「質」にこだわってほしいと思います。つまり、これは、単純にたくさん話せばよい、書けばよいということではなく、生徒自身、自分にとって意味のあるアウトプットを行う機会を増やしてほしいということです。中学校のコミュニケーション活動は、形だけの「おざなりコミュニケーション」になりがちです。生徒が「はいはい、伝えればいいんでしょ」といった雰囲気では、文型練習の域を出ません。そうではなく、情意タスクとも言われますが、生徒が自然に「えっ、それって本当?」「あ、そうなんだ」ということばが口からもれるような情報のやりとりを伴うのが、本来のコミュニケーション活動の姿です。

実は、こうしたコミュニケーション活動の目的感や、やりとりされる情報の質にこだわる点は、小学校外国語活動の趣旨にもとづいて、多くの小

学校の先生が取り組んでいることなのです。自分にとって意味のあることを伝えられるという実感がないと、子どもたちは、本当の意味でことばを使おうとしないからです。中学校では、もちろん英語の定着という使命を意識しつつも、そうしたことばを覚えるということを超えて、わくわく感のあるコミュニケーションを大切に授業のあり方を、ぜひ中学校の先生に小学校から学んでいたきたいと思います(萬谷ほか2011:28)。なお、こうした本来のコミュニケーションの要素は、スピーキングだけでなく、ライティングでも意識すべきことです。

●正確さへの意識を徐々に高める

小学校外国語活動を経験した生徒たちは、積極的にコミュニケーション活動に取り組んだり、音だけでやりとりしたりすることに慣れてきているという反面、「通じればよい」と考える傾向が感じられる場合もあります(萬谷・志村・中村・宮下2013)。通じればよいという態度は、コミュニケーションではとても大切なのですが、中学校では生徒たちにそこから一つ上の段階に進んでほしいものです。ただ、正しく言おう、書こうというかけ声だけではなく、なぜ正確さが必要なのか、その意味を意識できる指導が必要です。正確さを高めることは、より大人のきちんとした英語が使えるようになること、また樋田(萬谷ほか2011:130)が指摘するように、今まで言えなかったことが言えるようになるという表現の幅が広がりを感じさせる指導が必要です。

●音声から文字へ、かたまりから分析へ

小学生は英語をどのようにとらえているのでしょうか。たとえば、What color do you like?は、5つの単語から成っていますが、小学生はそうとらえていない子が多いようです。つまり、「ワッカラ/デュー/ライク」などのように、「かたまり」として覚えていると思われます。「そんないい加減な」と思われるかもしれませんが、小学校でこのような音のイメージを身につけてくるということは、大きな利点ととらえるべきです。中学校では、そうした音声の「かたまり」を、まずは文字でどのような単語に分解されるのかを認識させ、さらに文法で文の仕組みを意識させる指導が重要になってきます。場面と表現をまるごと覚えるという小学校の特長を引き継ぎ、次のステージに生徒たちを引き上げることがこれからの中学校の英語教師の大切な役割です。

●会話を広げる力

小学校外国語活動での会話活動では、Do you like cats? - Yes, I do. - Oh, me too.など、話者がたずねて、相手が答え、話者が反応するという、一往復半程度の会話までしか扱うことができません。しかし中学校では、会話をさらに広げ、深める力の涵養を目指すべきです。その意味で、相手への「質問力」を磨くことや、相手への答えにプラス・アルファの情報を付け加えることなどは重要な練習です。ここでも、単に会話の技術に偏ることなく、上述のように、「内容的な興味に背中を押されて会話を深めたい」という要素を意図的に活動に取り込んでほしいと思います。また、棚原(萬谷ほか2011:111)や小崎(萬谷ほか2011:116)などのように、習った表現を使って談話や場面を創造するスキットづくりも有益な取り組みです。なお、こうした会話を広げる力は、書く力での談話構成力にもつながっていく要素をもっています。

●自律的学習習慣をつける

小学校外国語活動での外国語「体験」と異なり、中学校英語は、「学習」に移行するということです。山本(2012)が指摘するように、小・中連携は、ギャップを緩和するという大きなメリットがある一方で、逆に小・中の「境」がなくなってしまうと、緊張感が下がり、家庭学習など地道な学習の習慣が弱くなるなど、逆に好ましくない傾向ももたらします。やはり、生徒たちには、中学生らしい、ぴりりとした緊張感が必要です。中学校に入学したら、「努力して学ぶ」という学習モードに徐々に慣れていく必要があります。努力を積んだ先に、言える・わかる・書けるという有能感を感じる経験を積み重ねて、自律的な学習習慣を育てる必要があります。

おわりに、新しい時代の変化に対応して、これからの中学校英語教師には、小学校外国語活動の趣旨や内容を理解し、中学校英語の役割をとらえ直す、「やわらかい専門性」が求められています。

参考文献

- 山本玲子(2012)「中1ショックは悪なのか-小中連携の先に見えるもの」『日本児童英語教育学会第33回全国大会資料集』pp.39-42
- 萬谷隆一・志村昭暢・中村香恵子・宮下 隼(2013)「小学校外国語活動の成果に対する中学校英語教師の意識調査」『小学校英語教育学会会誌』第13号, pp.134-149
- 萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生(2011)『小中連携Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂



夢ある英語教育を目指して

北海道厚真町立厚真中学校教諭 道源 由加里



1. はじめに

平成23年度から、小学校において外国語活動が必修化されました。本町の小学生は、外国語活動を通して、英語や海外の文化に触れ、生き生きと活動しています。

厚真町は人口約4,800人のとても小さな町です。町内には、小・中学校が各2校あります。本町は、英語教育推進委員会を設置し、町全体で英語教育に取り組んでいます。平成24年度から2校の小学校では、1年生から4年生まで文科省の教育課程特例校に認定されたことを受け、全学年で外国語活動を行っています。本町では、毎月各学校の外国語活動や英語の授業を参観し合い、小・中の接続をどうすべきかを推進委員会の中で検討、模索しています。また、2名のALTの先生が町に駐在しており、その恵まれた環境を最大限に生かす方法についても意見交換しています。生徒にとって、生の英語に触れる機会はたいへん貴重なものです。英語を学ぶうえで大切な必然性を生み出すうえで、ALTの先生方の力は大きいと感じます。

本町では、「厚真町の夢のある英語教育」を目指しています。小学校で培った力をしっかりと生かし、さらに伸ばしていくために、平成23年度より2校の中学校では、コミュニケーション活動を中心とする共通カリキュラムを作成して、その活動の工夫を図ってきました。そして、英語で発信のできる生徒の育成を目指し、各学年の発達段階に合わせて、さまざまな英語の活動を取り入れてきました。それらの活動についてご紹介したいと思います。

2. 平成23年度

(1) 1年生

平成23年度は、1年生で2つの「特設スキット」と「自己紹介」の発表を行いました。スキットは「電話」と「買い物」の2場面を設定しました。教科書の題材とは別に、ALTの先生と協力して実践的な会話例を作成し、自作の教材をもとに活動

を展開しました。生徒たちは、その例文をもとにして自分たちでオリジナルのスキットを作成して、実際に演じました。電話で話したい相手が、すぐに出られないシチュエーションを設定し、しっかりと電話の相手に英語で説明する場面、ファーストフードで買い物をしたら、店員さんが「今なら一緒にポテトを買うとお得です」といった接客をする場面など、それぞれ実際に起こりうる状況を想定し、工夫して活動していました。

また、「自己紹介」では、各自が自分のことと身の回りのことについて15文程度の英文でスピーチを作成し、それを暗記して発表しました。その際、必ずスピーチの内容に質問を含めることとし、発表のときに聞いている人に質問を投げかけ、一方通行ではないコミュニケーションをとりながら、会話する形式でスピーチを行いました。また、スピーチの内容に関わるものを見せ、聞いている人により伝わりやすくなるような工夫も考えさせました。普段の授業では十分に英語を使う機会がないなか、全員がたくさんの英語に触れる時間を多く設けることができました。生徒たちは積極的に英語を使い、英語で伝える力を伸ばすことができましたと感じました。

(2) 2, 3年生

2, 3年生では、「英語劇」にチャレンジをしました。平成23年度は『桃太郎』を英語で演じました。台本は、ALTの先生方の協力を得て2~3年生で習得する学習内容を用いて作成しました。英語が苦手な生徒でも、非常に生き生きと活躍する姿が印象的でした。活動が終わると「英語が少し好きになった」と言ってくれた生徒がいたことは、たいへん嬉しいことでした。

3. 平成24年度

(1) 全学年

平成24年度は、平成23年度の取り組みを生かし、APR(Atsuma PR Project)という新たな活動を全学年で展開しました。

1年生は、自分が興味のある国や地域について調べ、海外の人に英語で発表しました。英語を学ぶだけでなく、さまざまな国や地域について知ることで、自分たちが住む厚真町との違いを知り、改めて厚真町のよさに気づかせることもねらいとしています。英語で伝え合うことを経験し、ただ話すのではなく、身振り手振りや、目に見えるものを提示することで伝わりやすくなるなど、どうすればより相手に伝わるのか、ということに多くの気づきがありました。

2, 3年生は、厚真を海外の人に知ってもらうための活動と位置付け、厚真の「産業」「観光」「イベント」「歴史」「スポーツ」「教育」「食」など、さまざまなカテゴリーごとに詳しく調べて英文を作成しました。そして、海外の人を招いて本校体育館に仮想外国空間FVS(Foreign Virtual Space)を作り出しました。その空間の中で生徒たちは、さまざまな国の人たちに、厚真について英語で伝える活動を行いました。発表当日、生徒たちは、いろいろな人を相手に何回も英語を使って説明をしていました。来ていただいた海外の方々に厚真のよさをアピールし、また、相手の方にも出身国について話してもらいながら、外国のことを知る貴重な機会にもなりました。この活動を通して、改めて自分たちが暮らす厚真町のよさを再認識したり、知らなかったことを知ることができたりと、英語を学ぶ以外にもプラスになることが多い活動になりました。何より生徒たちは、準備の段階から、これほど多く英語を使う機会がこれまでになく、最初は大変に感じた生徒もいましたが、最終的には全員が「英語で発信・受信する楽しさ」を実感できていました。

(2) 2, 3年生

2, 3年生は、平成23年度に引き続き英語劇を行いました。2年生は『桃太郎』、3年生は『白雪姫』と『ピーターパン』を演じました。2年生は、セリフに合わせた表現方法の工夫に特に力を入れました。声の変化や身振り手振り、表情の変化など、身体全体をうまく使い、「見ている人に伝わること」を意識して演じることができました。3年生は、台本の1部に空白の部分設け、自分たちでストーリーを組み立て、台本を完成するというチャレンジをさせました。オリジナルのストーリーとは異なるものができあがったところもあり

ましたが、自然と話が流れるように生徒同士が協力し合いながら英語で台本を作りあげ、見ている人も楽しめる個性豊かな素晴らしい英語劇に仕上がりました。「来年もまた取り組みたい」「ずっと続けてほしい」などの声が多く、また「英語で表現する力が高まった」と感じる生徒が多数いました。また、参観した1年生からは、「(セリフの)英語が難しかったが、ジェスチャーや表情などで何を言おうとしているのかが伝わった」などの声が多く聞かれました。

(3) その他

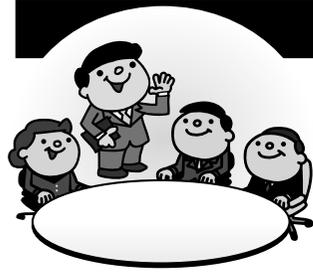
2年生の取り組みとして、厚真町と本町の特産品であるハスカップを、海外の方々に英語でPRする活動を札幌駅構内で行いました。駅構内にいた海外の方々に声をかけ、立ち止まっただき、厚真町についての説明を聞いてもらいました。断られることもあるなか、積極的にコミュニケーションを図っている姿を非常に頼もしく思いました。

(4) まとめ

本校では、英語の授業は英語教室で行っています。教室には、壁いっぱいに掲示物を貼っています。英語に囲まれて英語を学習する環境を作り、普通教室とは違った雰囲気にする一方で、自然と英語を学習する気持ちに切り替わるよう工夫しています。掲示物の中には、文法の説明を簡潔にまとめたものがあります。生徒たちは、いつでも掲示物を手掛かりに文法の確認をすることができるようになっています。この英語教室という環境が、少しでも、1人でも多くの生徒の役に立っていたら嬉しく思います。今後も、この英語教室をより一層充実させながら活用を図っていきたく思います。

4. おわりに

最後に、普段の英語の授業で学んでいることを生かせる機会を意図的に設けることは、学習者の学習効果や学習意欲を高めることができると強く実感しました。そして、これからも多方面で英語を活用できる生徒の育成、「厚真町の夢のある英語教育」を目指し、日々工夫した英語教育を展開していきたくと考えています。



Challenging the New Sunshine

山形県飯豊町立飯豊中学校教諭 長谷部 明子



1. はじめに

今年度から英語の授業が週4時間となったことに加え、私が勤務する地区で新たに*Sunshine English Course*が採択された。今年度の受け持ち学年は1, 3年生。特に3年生では昨年度までの教科書から*Sunshine*に変わったことで学習内容を取りこぼさないことや生徒たちが抵抗なく教科書を取り扱えるよう配慮してきた。地区内の研修会では*Sunshine*のよさや活用法について学ぶ機会があり、実践に生かそうとした。しかし現実には、単元終了時にたくさんの課題や反省を残しながら8か月が過ぎた。

2. 楽しさを実感～Program 8 Clean Energy Sources

このプログラムの文法事項は目的格関係代名詞の用法と後置修飾の文構造である。新出語句にはfossil fuel, solar heat, turbineなど発電に関わる用語が20以上あった。化石燃料とは…。太陽光発電と太陽熱発電のしくみとの違いは…。はじめはそんな基本的なことでさえ難しく感じた。しかし、教材研究を進めるうちに私の中で次々と新たな疑問がわいてきた。この辺の発電はどうなっているのか？ 波力発電や地熱発電のしくみは？ 原子力発電の今後は…。気がつく私は町や県のホームページから電力会社や環境省のホームページまで辿り、このテーマにすっかりはまっていた。そしてセクション3の「自分たちが住んでいる地域に適する発電方法は何だと思うかを説明する文を書く」活動で生徒たちの意見を交流させたいと考えた。授業は次の4点に留意して展開した。

- (1) 従来型発電と新エネルギー発電を対比しながら進める。【背景知識(schema)のインプット】
- (2) 新出語句や内容の理解に視覚教材を活用する。【背景知識の活性化】
- (3) 内容理解を深める学習プリントの工夫。
- (4) 考えを深める補助資料の工夫。【思考を支える背景知識のインプットおよび題材内容と自分との関連性の提示】

私たちの生活に欠かせない電気・電力の供給方法の違いやしきみについて大方の生徒が関心を示した。特にセクション2あたりからは、授業後に改めて説明を求めにくる生徒や、理科の電力の授業に関連づけて話をする生徒が出てきた。学習プリントへの取り組みもよく、リーディングを通して理解が深まっているのがわかった。

英作文では、火力と原子力以外の発電方法それぞれに意見が分かれた。例文に似た英文が半数を占めたが、Program 2のVolcanoes in JapanやProgram 3のThe 5 Rs to Save the Earthの学習内容が反映された英文もあった。また、「マグネシウム合金発電」という新たな発電方法を提案する生徒もおり、交流の場面では互いに影響されて最終的な考えが変わったという生徒もいた。

<作文例>

I think ~ power is the best becauseに続けて
solar power We have sunlight every day. In winter, we can get sunlight from reflection light.
water power Japan is gifted with water and it is recycling energy. But we must keep the forest.
wind power It blows from west every day. It doesn't produce CO₂ and wind power station can make a lot of electricity all year around.

3. おわりに

Program 8を終えての反省点として、先の留意点の(1)や(2)の場面でのオーラル・イントロダクションによるインタラクションをもっと活発にできたことや、生徒たちに調べ学習や(4)の資料作りをさせると英作文の力や交流をより高めることができたと感じる。いずれにせよ、授業のための教材研究がいかに大切か、そして*Sunshine*を読んでいる楽しさを3年生最後のプログラムで実感することができた。今後は「英語を通して題材のよさがより実感できる」「題材を通して英語が学べる」授業を目指し、研鑽を積んでいきたいと思う。



My Projectの活用法

神奈川県横須賀市立大楠中学校教諭 楯木 佑子



1. 内容・必然性・学び合い

授業でのコミュニケーション活動を成功させる鍵は、環境づくりだと思う。テストや将来のためという目標では、中学1年生のモチベーションを高めることは難しい。生き生きとしたコミュニケーション活動を行うには、伝えたい内容、英語を使用する必然性、仲間との学び合いが必要だと思う。新しい*Sunshine English Course*にはMy Projectとして年間3回のプロジェクトワークが組み込まれている。3～4か月ごとに目標が設定されているため、生徒はどこに向かって学習すればよいのかわかりやすい。私はMy Projectを一つの目標として授業を進めている。

2. 場面設定

My Project 1については、この課題に取り組む時期までに、生徒たちはHRや他教科で互いの自己紹介を何度か聞いている。そこで、「実はこんな特技持っています」といった新しい情報にジェスチャーを交えて紹介することになっている。また、本番のスピーチはALTと1対1で、スピーチのあとにMy Project 3の中から簡単なQ&Aを行う。その間、ほかの生徒は順番でプロンプターやタイムキーパーとなり、それ以外の生徒はリスナーとしてコメントを書き、スピーチの最後に英語で一言コメントをするようにしている。

My Project 3については、1年生の夏頃から毎回のWarm-UpでQ&Aを取り入れ、さまざまなバリエーションで行っている。クリスマス・クロスゲームでALTに質問したり、三人称の練習でALTの持ってきた家族写真について質問したり、生徒同士、グループ内で質問したりしている。目標は1年生の終わりまでに初対面の人とでも積極的に英語でコミュニケーションが図れるようにすることである。年度末にゲストティーチャーによるQ&Aを実施し、アイコンタクト・発音・積極性についての評価をもらった。

My Project 6を扱う際は、生徒たちの考えが深まるテーマを選ぶことが重要だと思う。昨年度受け持った3年生では、震災復興のために自分たちにできることは何かについてディベートを行った。中学3年生の精神的な成熟度や知的好奇心から考えると、単に文法や語彙を積み上げて学習していくだけではなく、伝えたい内容さえあれば、英語の得意不得意にかかわらず、どの生徒も教師の予想以上に英語力を高めることができるのだと確信することができた。

3. 学び合いを取り入れる

生徒たちは教師から学ぶこと以上に、生徒同士で多くのことを学んでいる。そこで、スピーチテストやインタビューテストでは、過去に同じ内容を扱った卒業生のVTRを見せるようにしている。そうすることで、自分の目指す姿をイメージしやすくなるからである。また、進行中のMy Projectの取り組みの様子を撮影し、「ほかの人のよいところはどんどん参考にしよう」とほかのクラスで紹介することで、クラスを超えた相乗効果が期待できる。ほかにも、テストの際、はじめは表現力(ジェスチャーやイントネーション)を観点にし、学習が進むごとに説得力のある内容かどうかを観点にするなど、評価のポイントを決めてコンクール形式で行う。すると、その課題では何が求められ、どこまでその力を高めればよいのか、生徒自身ははっきりと理解するようになる。「今の発表はここができていなかったからBかな」、「全部クリアしていたからA」など生徒自身から聞くようになってくる。このように、生徒からのアウトプットをほかの生徒のインプットの材料にするよう工夫をしている。

授業を通して仲間と関わり合い、認め合う関係が生まれることで、自己肯定感が高まり、お互いに安心して学習することができる。授業を通じて、そのような関係をつくっていききたい。



英語って楽しい!

～アクションカードで英語好きが増える!?～



石川県金沢市立長田中学校教諭 泉 洋美

1. ステキな出会い

生徒：先生！ 今日アクションカードやる？
私：もちろんやるよ～。早く並べて～。
生徒：やったあ～！

授業開始前の休み時間の会話である。生徒は休み時間の間に2人1組でアクションカード(以下AC)を机の上に並べ、どこにどのカードがあるかを確認する。チャイムが鳴り、あいさつや簡単なQ&Aのあと、「Are you ready?」「Yes, I'm ready.」で「決戦」がスタートする。

今年度より新学習指導要領が施行され、金沢市では新しく *Sunshine English Course* (以下 *Sunshine*) が採択された。そして、新しい教科書との出会いがたくさんの人との出会いを連れてきてくれた。私にとっても1年生の生徒にとっても、ステキな3年間の始まりである。

2. 小・中連携の大切さ

「今日、この時間でどんなことができるようになりたいかな? 今日の目標を考えてみよう!」
小学校の先生はすばらしい! 長田中学校区には3つの小学校があり、中1、小6(主に)の公開授業を行い、相互参観する授業研究を行っている。今年度は中1のクラスで、小学校の授業からヒントを得たことを取り入れて公開授業を行った。導入から自分たちで本時の目標を考え、その目標に向かって授業を進めていくのである。その中には学び合いや助け合いもある。生徒が自ら進んで、英語を使ってコミュニケーションを図りながら「考え表現する力」をつけていく。そのときにACが生きるのである! ACでinputした表現を自分のことばとし、outputする。小学校で学んだことを中学校で活かすとき、ACが架け橋になる。「楽しい授業」はここから始まる。

3. My Projectのすごさ ～ACが生きる～

各学期の最初に、生徒が見るページ! それが

My Projectである。最初に各学期のGoal(目標)を示す。学習の見通しをもたせて、授業をスタートする。各ページで学んだ表現を積み重ね、まとまりのある文を作る。これがMy Projectのすぐれた点である。PROGRAMごとに完結するのではなく、関連し合いながらMy Projectへとつながるのである。

ACで学んだ基本的な形を応用して、自己表現することができるようにする。以下に例を示す。

My Project 1 ～自己紹介をしよう～

I after school.

I every day.



My Project 2 ～人を紹介しよう～

My friend after school.

He every day.



My Project 3 ～どんどん質問しよう～

Do you after school?

Does he every day?

Did she yesterday?

4. アクションカードの使い方 (by Izu)

新しい*Sunshine*には、生徒がsmall stepで4技能の総合的な活動を通して、これらの技能を統合的に習得できる工夫がなされている。その中の1つがACであり、生徒たちにとって不可欠な「道具」である。以下は私が授業で実際に活用している方法の一部である。

(1) 準備・方法

- ①生徒は全員、かるたと同様に1枚1枚切り取り、36枚すべてに名前を書いておく。
- ②授業開始1分前までに机の上に並べる。
- ③多くの枚数のACを取ったほうが勝ち。
- ④ジェスチャーを使う方法もある。
- ⑤かるたと同様にカードを取るときはYes、取

れなかった人はNoとすることとする。

⑥Yes/No+1文を付け加えるとき、間違えると相手のカードとなる。

⑦活動終了後、取った枚数を数え、お互いに何枚持っているかをたずねる。

A: How many cards do you have?

B: I have ten cards.

⑧前期はすべてのカード(1枚残す)を取るまでやり続ける。

⑨11月頃より時間を限定し、5分間とした(将来、帯学習としてACの活動を取り入れるため)。

(2) 実践例

①PROGRAM 3 導入前

※質問に対する答え方: Yes / No

T: Do you .

S: Yes, I do. / No, I don't.

②PROGRAM 3-1のあと

※質問に対する答え方: Yes / No + 1文

T: Do you .

S1: Yes, I do. I .

S2: No, I don't. I don't .

※まだ習っていないときからくり返し練習しておくことで、inputされる。

③PROGRAM 6-1のあと

※質問に対する答え方: Yes / No + 1文

T: Does Akira / Aya .

S1: Yes, he / she does.

He / She .

S2: No, he / she doesn't.

He / She doesn't .

④PROGRAM 9-2 導入前

T: Are you now?

S1: Yes, I am.

I am now.

S2: No, I am not.

I am not now.

I am now.

T: Is Akira / Aya now?

S1: Yes, he / she is.

He / She is now.

S2: No, he / she isn't.

He / She isn't now.

He / She is now.

⑤PROGRAM 9-3 導入前 (表面(絵)でも裏面(単語)でもよい)

※先生と生徒、あるいは生徒同士

S1: (ジェスチャーしながら) What am I doing now?

S2: Are you now?

S1: Yes, I am. I'm now. など

⑥PROGRAM 10 導入前

T: Did you yesterday?

S1: Yes, I did. I yesterday.

S2: No, I didn't.

I didn't yesterday.

I yesterday.

⑦まとめの活動

T: Why do you .

S1: Because I like English songs.

S2: Because you like English songs.

T: How do you .

S1: I by bus.

S2: I walk to school.

(3) 魔法の道具!?

ACは授業最初の5分間で使っている。生徒はこの活動を通し、36の動詞を覚える。それだけではなく、これらの動詞を使って自己表現できるようになっていく。生徒の努力もあるが、パフォーマンスを引き出す道具であることは間違いない。

5. アクションカードは生徒の宝物!?

アクションカードは生徒が楽しみながら覚えられ、彼らにとっては不可欠な「道具」である。アクションカードは、36もの動詞を覚えて自分の「ことば」として使うことができるようになる、言わば「魔法の道具」ではないかと思う。本稿で紹介したことは、自分が日頃考えていることや授業で実践していることであるが、もっと効果的な使い方もあるだろう。今後さまざまな機会を通して学んでいきたい。そして、日々の授業での実践を重ねながら、アクションカードが生徒にとっての「道具」から「宝物」になるように活用法を研究していきたい。

台湾の小学校英語教育

小学校に外国語活動が導入された頃より、そうした事例で先行するアジア諸国から何らかの示唆を得ようとする動きが活発になっている。台湾では日本に10年以上先行して、小学校に英語教育が導入された。昨年暮れに台湾で小学校の英語授業を参観する機会を得たので、台湾から学べることは何かについて述べてみたい。

1. 小学校英語導入の経緯と実態

1990年代に高雄市や台北市といった自治体が、小学校で英語授業を開始したのが始まりである。背景には英語を使える人材を育成してほしいという、産業界からの強い要請があった。その後地域による格差を解消するため、台湾政府は2001年より台湾全土の公立小学校で、5、6年生を対象に週2時間の英語授業を導入した。その2年後には、英語授業開始を3年生から引き下げている。

小学校英語教育の目的は、日本と同様に「基本的なコミュニケーション能力を育てる」ことである。音声面の指導を重視しながらも、文字や文法の指導も同時に行われている。

授業はほぼ英語専任の教員が担当している。育成に関しては、教育大学に必修の英語科目を増やすとともに、英語教員の資格試験を設け、合格した教員を英語専任教員として雇用している。英語教師に対しては、研修やワークショップなど手厚いサポート体制がある。

教材は複数の検定教科書から、自治体ごとに選定することができる。CDやワークブックが付属しており、授業内で活用されている。

2. 授業参観から

まず高雄市の国民小学校(公立)3年生の授業を参観した。英語専任の教師が、主に母国語を使って、アルファベットの書き方を指導していた。児童はワークブックの問題に取り組んだり、文字を発音したり書いたりする活動に取り組んでいた。児童同士で何かを伝え合うというようなコミュニケーション活動はほとんどなく、スキルの習得(文字知識)に終始した授業であった。

次に見た台北市立教育大学附属小学校3年生の

授業は衝撃的だった。台北市では1年生から英語授業を導入している。また、多くの子どもたちが、民間の英会話塾に通っている。そのため3年生ながらもすでにかなりの英語力を身につけている。教師はすべて英語で授業を行い、児童は完璧にそれを理解していた。「身につけているもの」を表現するという授業だったが、児童の発する英語はとても自然で流暢であった。

3. 日本の外国語活動への示唆

附属小学校の授業を参観したあとで、台北市立教育大学の英語専攻の学生と話し合う機会があった。彼らのなまりやよどみのない美しい英語にはさらに衝撃を受けた。この一件だけですぐ小学校英語の成果が出ていると断じることにはもちろんできない。しかし全力で英語教育に取り組んでいる台湾が、日本よりも多くの英語のできる人材を生み出していることは間違いないようである。

韓国もそうだが、台湾の英語教育に対する真剣さは、日本のように大きな国内市場を持たないゆえに、海外で勝負していかなければならないという事情が大きく影響している。台湾の方針すべてを日本に持ち込むことはできない。見習うべきは、クラスサイズと英語教師の質であろう。語学に応じてクラスをもっと少人数にすべきだし、小学校だからこそ、質の良いインプットが与えられる教師を配置したい。もし担任に任せ続けるというのなら、もっと手厚いサポートをすべきである。逆に見習わなくてよいのは、文字も含めた4技能を最初から導入することであろう。現在の外国語活動のように、まずは音声にたっぷり慣れ親しませてから、ゆっくり文字を導入していったほうが、英語嫌いを多くつくらずに済む。今後もアジアでの英語教育の動向を見据え、取捨選択しながら、日本の状況にあった小学校英語教育を模索していくことが求められるであろう。

(北海道教育大学教授 笠原 究)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。掲載号につきましては、原稿到着時に決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。